

《青華氷梅紋花瓶》

一点

明治二十七年（二八九四）陶磁 径三六・〇、高四七・〇



抑揚のある引き締まった端正な器形に、地を濃染め（青色顔料で塗りつぶすこと）して、その濃染めの上から氷裂文を描き、白抜きした部分で枝垂れる梅樹を表す。器形や図様から清朝康熙年間（一六二二—一七二二）の作風に倣ったと考えられる精巧な作品である。前年となる明治二十六年（二八九三）のシカゴ万博に出品された「黄釉銹絵梅樹文花瓶」（東京国立博物館蔵／重要文化財）も同様に清朝陶磁の強い影響が見られることからわかるように、明治二十年代後半の宮川香山（初代一八四二—一九一六）の作風を典型的に示している。明治二十七年に開催された日本美術協会の春季美術展覧会で二等賞銀牌を受賞した。

パリ万国博覧会出品作が日本的であることを強く意識して制作されたのに対し、わずか数年前に制作された本作では徹底的な中国陶磁の模倣が行われている点が興味深い。これはその当時の欧米に広まっていた清朝陶磁に対する高い評価が反映されたもので、香山だけでなく、日本でも優れた技術を持つ一部の製陶家は意欲的に清朝陶磁の研究を進めていた。

宮川香山は京都の陶家に生まれ、若くして家督を継ぎ、備前虫明焼の指導に当たった後、横浜に移り太田村に窯を開き、真葛焼と称して海外へ販路を拡大した。明治九年（一八七六）のフィラデルフィア万博で受賞後、内外の数々の博覧会で受賞を重ねたほか、同二十九年には帝室技芸員に任命されるなど、明治期を代表する製陶家の一人である。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

皇室技芸員と一九〇〇年パリ万国博覧会

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 47

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成二十年七月十九日発行

© 2008 The Museum of the Imperial Collections